

コロナのワクチンの有効性があまりに硬かった影響もあってなのか、HPV ワクチンも最近見直しの気配があります。

もう一つ米国では小児の 4 分の 3 が既に Covid-19 に罹患したという驚くべき報告とあわせてお届けします。

1)

担当：小林

題：HPV ワクチンの強力なウイルス学的効果

結論：HPV ワクチンは HPV に対して直接的な効果と集団に対する保護に関して強い効果がある

原題：Rosenblum HG et al.

Human papillomavirus vaccine impact and effectiveness through 12 years after vaccine introduction in the United States, 2003 to 2018.

Ann Intern Med 2022 May 17; [e-pub] (<https://doi.org/10.7326/M21-3798>)

本文：4 価ヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチンはアメリカにて 2006 年に女性に、2011 年には男性に対して臨床的に導入された。2015 年には 9 価 HPV ワクチンへ変更になった。研究者らは 15 年の使用期間における HPV ワクチンのウイルス学的効果を評価した。

2003 年から 2018 年の間でのアメリカ国内での健康調査のデータを分析した。研究者は 14 歳から 24 歳の性交渉歴がある 3200 名の女性を対象に HPV セロタイプの有病割合を調査した。検体は対象者が自らスワブで採取した。2013 年からはデータは少ないが男性のデータも含まれている。

2015 年から 2018 年の期間では、女性の 60%、男性の 30%が少なくとも 1 回は HPV ワクチンを接種していた。ワクチン接種前と比較すると、4 価の HPV ワクチン接種後では 4 種類の HPV 有病割合は 90%低下し、ワクチン未接種のでは 75%に低下した。全体では 85%は低下した。2013 年から 2016 年の間ではこの 4 種類の HPV はワクチン未接種に比べ接種者では 50%以下であった。ワクチンのない HPV セロタイプの割合は観察期間では特に変化はなかった。

コメント (Abigail Zuger, MD) :

今回の研究では HPV ワクチンが直接的、または間接的にも HPV に対して防護作用をもつことを示した。編集委員も指摘しているように、長期的にみるとワクチン対象ではないウイルス型に置き換わってしまう懸念もあるが、今回のデータでそれは明らかに否定された。HPV ワクチンの普及は covid-19 の世界的大流行にて遅れてしまった。専門家は臨床医たちに若い患者らへ HPV ワクチンを推進するように強く促し、この研究結果を失わないようにしないといけない。

(NEJM Journal Watch June 15, 2022. Vol.42 No.12)

2)

担当：伊藤

題：米国の子供たちの4分の3は現在までにCOVID-19に罹患している

結論：ワクチン接種率が最も低いグループでは、血清罹患率が最も大きく増加した

原題：Clarke KEN et al.

Seroprevalence of infection-induced SARS-CoV-2 antibodies – United States, September 2021 – February 2022.

MMWR Morb Mortal Wkly Rep 2022 Apr 29; 71: 606

本文：

2021年、米国でのCOVID-19 Omicron波は記録的な症例数を引き起こしたが、症例の過小報告(無症候性感染症や自宅での検査による)によって真の人口レベルでの効果を知るには限られたものになっていた。米国CDCの研究者は、商業ラボで(COVID-19とは無関係の理由で)検査した血液検体の中から全国的に選んだサンプルを使用して、自然感染を示唆するSARS-COVID 19ヌクレオカプシド(ウイルスのゲノム(DNAあるいはRNA)とゲノムを包むタンパク質(カプシド)の総称)に対する抗体を持っている人の割合を推定した。45000~75000検体の得られたサンプルを2021年9月から2022年2月までの4週間ごとに検査し、年齢別の血清罹患率推定値を作成した。主な調査結果は、

- ・すべての年齢層で、血清罹患率は2021年12月の34%から2022年2月の58%に増加した。
- ・最大の増加は、小児(年齢範囲、0~11; 44%~75%)および青年(年齢範囲12~17; 46~74%)で発生した。
- ・2022年2月までに、小児および青年の4分の3がSARS-Cov-2に感染しており、これらの感染の約3分の1はオミクロン波の間に発生している。

コメント：

これらの結果は、オミクロンの強い感染性を浮き彫りにしている。この研究は感染と抗体検出の間に約2週間のタイムラグがあるため、集団有病率を若干過小評価している可能性が高い(つい最近の感染者は検査で陰性になる可能性あり)。さらに、使用される抗体検査は特異性が高く、偽陽性の可能性は非常に低い。この抗体が将来の感染に対してどの程度感染防御に役立つかは不明であるため、感染の既往に関係なく、すべての適応のある人々にワクチン接種が推奨される。

(NEJM Journal Watch June 15, 2022. Vol.42 No.12)